

現代の若者の価値観と友人関係

南 学

Youth's sense of values and friendship style

Manabu MINAMI

要 旨

本研究では、現代の若者がもつ幸福観と価値観との関連から現代の「幸せな若者」像（古市，2013）について明らかにすることを目的として検討を行った。結果は、幸福観によって若者を 3 群に分けたところ、「現状満足群」のほうが従来の友人関係を維持することを求めることが示されたが、地元志向に関しては有意な差は見られなかった。また「現状満足群」よりもすべてのことを追求する若者像である「全追求群」のほうが、「主観的幸福感」が高く、友人関係においても「表面的友人関係」、「内面的友人関係」に関しては「全追求群」のほうが高かったことが見出された。

これらの結果から、古市（2011；2013）が指摘する「幸せな若者」像はすべての若者にあてはまるものではないこと、その「幸せな若者」群の幸福感がとくに高いわけではないことが見出され、古市（2011；2013）が提唱した若者の価値観の傾向と幸福感を結びつけた「幸せな若者」論は実証性に欠けることがあらためて示唆された。

キーワード：若者、価値観、友人関係、主観的幸福感、コンサマトリー化

問題と目的

1. 若者を取り巻く状況と幸福度との関連

近年の日本は、少子高齢化や財政赤字、領土問題などの他国とのトラブルなどの問題、原発事故の影響などがあり、若者を取り巻く社会の状況はよいとはいえず、また将来についても簡単に良くなるとは言えない状況である。しかしこのような状況にも関わらず現代の若者は幸福感が高いということが明らかにされている。豊泉（2010）は、バブル崩壊後に日本経済が低迷し、阪神・淡路大震災が起きた 1990 年代以降の若者が意外にも幸福を感じていることを指摘している。たとえば、内閣府（2009）の「国民生活に関する世論調査」において 20 歳代の生活満足度がもっとも高いこと、NHK 放送文化研究所の「中学生・高校生の生活と意識調査」において「とても幸せ」と回答する中高生が増えてきている（政木，2013）こと、内閣府（2009）の「世界青年意識調査」において「幸せ」「満足」と回答する若者が増えてきていることを示している。社会の状況が幸せとは思えない現代において、幸福度の高い若者はどこに幸せを感じているのだろうか。

政木（2013）は、この点に関して、中高生の多くが「家にいると楽しい」、両「親とうまくいっている」、「打ち込めることがある」と答えていることから『居

心地がいい』というのが理由であると指摘している。また片桐（2009）は、「世の中をよくする」というような社会に対する目標よりも「自由に楽しく過ごす」「豊かな生活を築く」「なごやかな毎を送る」といった私生活に対する目標を選択する人が多いことを示し、学生たちは「コンサマトリー（自己充足的）」な価値観、すなわち身近で小さな幸せが一番大事であると述べている。

この点に関して、古市（2011）は、20 代の生活満足度が上昇するのは一般的に「不況」と言われるような「暗い時代」が多いことを指摘し、同時に「今よりもずっと幸せになる将来」を想定できないと考えられる高齢者は幸福度や生活満足度が高いことを挙げ、これより古市は、「今日よりも明日がよくなる」と思う時、人は「今が幸せ」と答えるのであるという解釈を行っている。つまり、絶望の中にいる若者が将来を見るのを拒絶し、「今、ここ」に目を向ける若者の増加が、「幸せな若者」の正体であるという仮説を提唱した。

2. 若者の個人差からの検討

ところで、これらの考察は、若者をあたかも一個人であるかのようにとらえ、若者の「性格」と幸福感が関連しているとみなしているが、個人差を考慮するならば、こうした考察はとても乱暴なものに映る。すべ

ての若者がコンサマトリー的な価値観をもっているという前提自体から実証的に検討することが必要である。南（2015）は、古市（2011）の仮説に関して、大学生を幸福に関する志向性の点から分類し、いくつかの心理的指標に関して実証的な検討を行った。その結果、古市（2011）が指摘するようなコンサマトリー的な群が存在することを確認するとともに、他方で自己成長なども求める群も存在し、そちらの群のほうが主観的幸福感が高いことを見出した。この結果から、全体としてはコンサマトリー的な若者がいるとしても、それが幸福感和直結しているわけではないことが示され、個人差を考慮して実証的に検討していくことの重要性が確認されたといえる。

3. 友人関係と幸福感

古市（2013）は、上述の仮説の代わりに、幸福感が周りの友人関係に寄って支えられているという仮説を強調した。それは、コンサマトリー的な価値観から身の回りの友人関係や地元というものを大切にしているため、そこを準拠点として高い幸福感をもたらしているというものである。同様の指摘は、阿部（2013）、原田（2014）でもなされており、コンサマトリー的な価値観と若者の「内向き」といわれる傾向を結びつけたものとなっている。

ただし、やはりこれらも若者を総体としてとらえており、コンサマトリー的でない若者の存在が考慮されていない。そこで本研究では、大学生を幸福に関する志向性の点から分類し、友人関係や地元に対する意識に関して実証的に検討をおこなうことを目的とする。

4. 本研究の目的

本研究では、若者の持つ価値観傾向との関連から現代の「幸せな若者」について明らかにすることを目的とする。

本研究では、南（2015）と同様に、“幸せ”への動機づけをとらえるための尺度である浅野・五十嵐・塚本（2014）が作成した日本版 HEMA 尺度を使用する。HEMA（Hedonic and Eudaimonic Motives for Activities）尺度は、個人や社会全体の“幸せ”を志向する快楽主義と幸福主義の両方を測ることができる尺度である。快楽主義は、自己の心地よさを求めた動機づけを指し、幸福主義は、自分自身の存在を最大限に生かすことを目指した動機づけを指している。本研究で使用する日本版は、日常活動において覚醒度の低いポジティブ感情を求めるかを測る「くつろぎ追求」、自分自身の存在を最大限に生かすことを目指しているかを測る「幸福追求」、覚醒度の高いポジティブ感情を求めるかを測る「喜び追求」の3下位因子で構成されている。「くつろ

ぎ追求」と「喜び追求」が快楽主義に対応し、「幸福追求」が幸福主義に対応する。南（2015）は、これらの回答にもとづいてクラスタ分析をおこなったところ、すべての平均が高い「全追求型」と自身の成長を求める幸福追求が低い「現状満足群」、くつろぎややすらぎを追求しない「向上志向群」に分けられることを見出している。片桐（2009）や古市（2011）が指摘するコンサマトリー的な志向性は「現状満足群」の特徴に近いと解釈できる。

友人関係を重視する傾向を測るために、内面的関係と表面的関係をとらえる友人関係尺度（齋藤・藤井，2009）、人間関係希求型質問（内田・遠藤・柴内，2012）、就職に関する地元志向を尋ねる質問（平尾・重松，2006）を用いる。

現代青年の友人関係においては、従来からある内面的な関わりを重視する、いわゆる「親友」と呼ばれる深い人間関係（内面的関係）ではなく、関わりを避け表面的な楽しさを求める関係（表面的関係）があることが指摘されている（岡田，1999）。この両側面を含んだ尺度として、齋藤・藤井（2009）の内面的関係と表面的関係をとりえる友人関係尺度がある。古市（2013）が指摘するコンサマトリー的な志向性をもつ若者の友人関係は、新規に広げていくことを求めるのではなく、同級生など地元の長年の友人関係をあたためていく関係であり、内面的関係が強いと予想される。

次に人間関係において、広げていくことを求める（開放型）のかそれとも狭くとどまることを求める（維持型）のかという点を確認するため、内田ら（2012）の人間関係希求型質問を用いる。内田ら（2012）は、この質問に対する回答によって幸福感に関わる友人関係の指標を比較しており、開放型ではつきあいの数が、維持型ではつきあいの質への評価が幸福感と関わることを見出している。この開放型と維持型を比較すると、現状満足群では維持型が多くなることが予想される。

最後に、地元志向に関してより直接的に検討するため、就職先として地元を選ぶかどうかという点について確認をするため、平尾・重松（2006）の就職に関する地元志向を尋ねる質問を用いて検討する。阿部（2013）や原田（2014）は、現代の若者は地元志向が強いことを指摘しており、現状満足群でより地元志向が強くなることが予想される。

また、本研究では、主観的幸福感を測るために曾我部・本村（2010）が作成した主観的幸福感尺度を使用する。自分自身がどれほど幸福であるかを聞く項目で構成されており、主観的な幸福度を測ることができると考えられる。

Table 1 日本版 HEMA 尺度の項目および平均（7 段階尺度）

	平均(SD)
くつろぎ追求 ($\alpha=.749$)	
くつろぎを追求すること	5.22(1.34)
気楽さを追求すること	5.30(1.33)
やすらぎを追求すること	5.30(1.30)
のんびりとした気分を追求すること	5.25(1.37)
幸福追求 ($\alpha=.774$)	
技術の向上、学習、あるいは物事への洞察力の獲得を追求すること	5.32(1.15)
自分の信念に従った行動を追求すること	5.34(1.29)
優秀さ、あるいは自分の理想を追求すること	5.33(1.18)
自分自身の力を最大限に生かす方法を追求すること	5.19(1.34)
喜び追求 ($\alpha=.747$)	
喜びを追求すること	5.84(1.11)
楽しさを追求すること	5.97(0.96)
面白さを追求すること	5.60(1.21)

方法

調査参加者 欠損値を除いた大学生 233 名。

質問紙の構成 日本版 HEMA 尺度（浅野・五十嵐・塚本, 2014）、内面的関係と表面的関係をとらえる友人関係尺度（齋藤・藤井, 2009）、人間関係希求型質問（内田ら, 2012）、就職に関する地元志向を尋ねる質問（平尾・重松, 2006）、主観的幸福感尺度（曾我部・本村, 2010）。

手続き 主に 1 年生を対象としたクラスで、4 月の初回の授業時に質問紙を配布し、回収した。

質問紙の構成

(1) 価値観を測る尺度

I. 日本版 HEMA 尺度

浅野ら（2014）が作成した日本版 HEMA 尺度（11

項目）を使用した。「くつろぎ追求」「幸福追求」「喜び追求」の 3 つの下位因子から成る。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の 7 件法で回答を求めた。Table 1 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

(2) 友人関係、地元志向を尋ねる質問項目

II. 内面的関係と表面的関係をとらえる友人関係尺度

齋藤・藤井（2009）が作成した内面的関係と表面的関係をとらえる友人関係尺度（34 項目）を使用した。「表面的関係」「内面的関係」の 2 つの下位因子から成る。「しない」から「いつもしている」の 4 件法で回答を求めた。平均点はそれぞれ 2.76(0.48), 2.76(0.50)であった。 α 係数はそれぞれ .783, .871 であった。

III. 人間関係希求型質問

内田ら（2012）が作成した人間関係希求型質問を示し、どれがもっとも近いかを尋ねた。Table 2 に使用した質問項目を示した。

IV. 就職に関する地元志向を尋ねる質問

平尾・重松（2006）が作成した地元志向を尋ねる質問を示し、どれがもっとも近いかを尋ねた。Table 3 に使用した質問項目を示した。

(3) 主観的幸福感を測る尺度

V. 主観的幸福感尺度

曾我部・本村（2010）が作成した主観的幸福感尺度（4 項目）を使用した。「そう思わない」から「とてもそう思う」の 4 件法で回答を求めた。Table 4 に使用した質問項目及び α 係数を示す。

手続き 授業時に質問紙を配布し、回答を求めた。回答に要した時間は 10～15 分程度であった。

Table 2 人間関係希求型質問（内田ら, 2012）

	人数
気心の知れた人たち（友人や家族、親戚を含む）と交流すること、新しい知り合いをつくって幅広くいろいろな人たちと交流すること、どちらも私の人生にとって必要であると思うし、実際に色々な人たちとつきあっている。	151
私にとって人間関係とは、気心の知れた人たち（友人や家族、親戚を含む）との関係を指す。その他の人たちは基本的に私にはあまり関係がない。自分をよく分かってくれている人との関係を大切にすることが、新しい関係を作ることよりも大切だと感じる。	69
家族や友人、親戚など、どのような人間関係であれ、私の居場所はない。集まりや食事会に参加したりするのは苦痛で、なるべくなら一人でいるほうが楽だと感じる。	4
私は家族や仕事場など、自分が積極的に作り出したわけではない人間関係に対して、ここが私の居場所だとあまり思わない。自分の居場所はどこか別のところにあると思うので、それを探して新しい人間関係を作りだしたい。	9

Table 3 就職に関する地元志向を尋ねる質問
(平尾・重松, 2006)

	人数
実家から通えるところなど、地元(出身地)で就職したい	97
出身県でなくてもよいが、近隣県で就職したい	63
東京など大都市に就職したい	21
そのほか特定の地域で就職したい	10
勤務地にはこだわらない	42

Table 4 主観的幸福感尺度の項目および平均(4段階尺度)

	平均(SD)
主観的幸福感($\alpha=.784$)	
全般的にみて、私は自分のことを幸福であると思う	3.10(0.63)
私は自分の同年齢の人と比べて、幸福であると思う	2.86(0.66)
私はどのような状況下でも人生を楽しみ、幸福でいられる	2.55(0.74)
私は、はたから見たときに幸せそうに見えたとしてもまったく幸せではない*	1.91(0.74)

*印は逆転項目

結果

1. 各尺度の下位尺度間相関

下位尺度間の関連を見るために、全下位尺度間の相関係数を算出した (Table 5)。

日本版 HEMA 尺度では「幸福追求」と「くつろぎ追求」「喜び追求」の間に有意な正の相関が見られた。「内面的関係」とは「喜び追求」と「幸福追求」との間に有意な正の相関が見られた。

また、「表面的関係」と「内面的関係」の間にも正の

相関が見られ、「主観的幸福感」とは「幸福追求」と「内面的関係」との間に有意な正の相関が見られた。

2. 日本版 HEMA 尺度に基づくクラスタ分析

現代の若者の特徴を分類するために、日本版 HEMA 尺度の 3 つの下位尺度を投入変数としたクラスタ分析 (Ward 法) を行った。解釈のしやすさから 3 クラスタ解を採用した。各クラスタの人数は、クラスタ 1 が 71 名、クラスタ 2 が 112 名、クラスタ 3 が 50 名であった。クラスタごとの日本版 HEMA 尺度の各下位尺度得点の平均値を示す (Figure 1)。各下位尺度に対して 1 要因分散分析をおこなったところ、いずれも群間の主効果が有意であった (「くつろぎ追求」「幸福追求」「喜び追求」それぞれ $F(2,230)=145.11, 61.30, 46.80, p<.001$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、それぞれすべての群間において有意な差、クラスタ 2 のみが有意に低い、すべての群間において有意な差がみられた。

クラスタ 1 は日本版 HEMA 尺度得点が全般的に高いという特徴を持つため、全追求群と命名した。クラスタ 2 は幸福追求得点が最も低いという特徴を持つため、現状満足群と命名した。クラスタ 3 はくつろぎ追求得点が最も低いという特徴を持つため、向上志向群と命名した。全体としては南 (2015) と同様の群分けとなった。

抽出された 3 つのクラスタを独立変数とし、表面的関係、内面的関係を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。

群ごとの内面的関係、表面的関係の 3 下位尺度得点の平均値を示した (Figure 2)。群間の主効果は内面的関係で有意であった ($F(2,230)=6.88, p<.001$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、全追求群と現状満足群、現状満足群と向上志向群との間に有意な差が見られた。これより、現状満足群は他の 2 群と比

Table 5 全下位尺度間の相関係数

	日本版 HEMA 尺度			友人関係尺度		主観的幸福感
	くつろぎ追求	喜び追求	幸福追求	表面的関係	内面的関係	
くつろぎ追求	—	-.068	.362 **	.081	.063	-.043
喜び追求		—	.372 **	.097	.271 **	.093
幸福追求			—	.124	.256 **	.222 **
表面的関係				—	.286 **	.117
内面的関係					—	.289 **
主観的幸福感						—

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

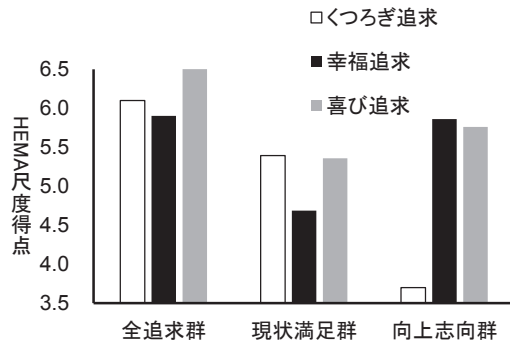


Figure 1 各クラスターの日本版HEMA尺度得点

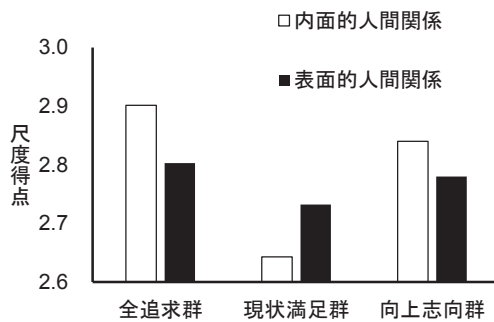


Figure 2 各クラスターの内面的表面的人間関係

べて内面的関係得点が有意に低いといえる。次に3群ごとの人間関係希求型質問の比較を行った。人間関係希求型質問では、カテゴリ3、4は少数である(Table 2)ため、以降の分析では、カテゴリ1を開放型、カテゴリ2を維持型と呼び、両カテゴリについてのみ分析をおこなう。群別の両型の人数を求め(Table 6)、 χ^2 検定をおこなったところ、現状満足群において有意に維持型が多く、向上志向群で維持型が少ないことが示された。

Table 6 各クラスターの人間関係希求型分類

	人間関係希求型	
	開放	維持
全追求群	48	19
現状満足群	65	42 +
向上志向群	38	8 -

$\chi^2=7.55, + -p<.05$

同様に3群ごとの就職に関する地元志向についても比較を行った。就職に関する地元志向を尋ねる質問では、カテゴリ1、2については一定数いるが、残りのカテゴリにおいては比較的少数であったため、まとめて、それぞれを地元志向群、地域志向群、広域志向群と呼び、以下の分析を続けた。

群別の人数を求め(Table 7)、 χ^2 検定をおこなったところ、有意な関連性はみだせなかった。

Table 7 各クラスターの地元志向

	就職に関する地元志向		
	地元	地域	広域
全追求群	33	18	20
現状満足群	48	34	30
向上志向群	16	11	23

n.s.

最後に3群ごとの主観的幸福感得点の平均値を示した(Figure 3)。群間の主効果は有意傾向($F(2, 232)=2.36, p<.10$)であったが、下位検定の結果はいずれの間も有意ではなかった。

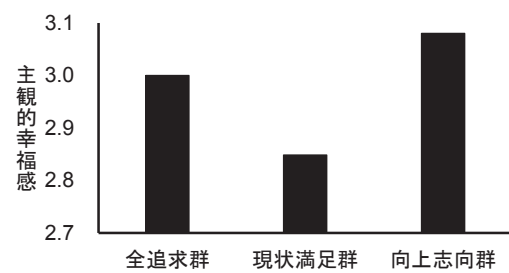


Figure 3 各クラスターの主観的幸福感

考察

1. 日本版 HEMA 尺度、内面的表面的友人関係、主観的幸福感の相関分析

相関係数を算出した結果、下位尺度間では日本版 HEMA 尺度に関して「幸福追求」と「くつろぎ追求」、「喜び追求」、友人関係尺度において「内面的関係」と「表面的関係」、「喜び追求」、「幸福追求」、主観的幸福感に関して、「幸福追求」、「内面的関係」に正の相関が見られた。

「内面的関係」と「喜び追求」、「幸福追求」の間に正の相関が見られたものの「くつろぎ追求」との間には見られなかったという点は、のんびりと気楽に生活するというコンサマトリー的な幸福感と内面的友人関係が結びつかないことを示しており、コンサマトリー的で、表面的な友人関係を求める現代の若者の友人関係の特徴を反映していると解釈できる。

2. クラスタ分析による若者の分類

日本版 HEMA 尺度の3つの下位尺度を投入変数としたクラスタ分析を行い、3つのクラスタに分け、全追求群、現状満足群、向上志向群の3つのタイプが存在することが明らかになった。このクラスタは南(2015)とほぼ同様の特徴を示しており、普遍性があることが確認された。

次に、このクラスタを独立変数とし、表面的関係、

内面的関係の尺度得点の比較をおこなった。結果は、現状満足群において内面的関係得点が有意に低く、また表面的関係得点においてももっとも低くなっていた。現代の若者が、古市（2013）が指摘するように、人間関係においてもコンサマトリー的な志向性をもつならば、少なくとも内面的人間関係得点は高くなることが予想される。それゆえ、本研究の結果からは古市（2013）からの予測は支持されなかったといえる。

次に、人間関係希求型質問の比較をおこなった。結果からは、現状満足群において維持型が多いことが示された。この結果は現状満足群は新しい人間関係を広げていくよりも以前からの人間関係を充実させることを好むことを示しており、古市（2013）の仮説を支持するものといえる。

ここで、表面的・内面的人間関係尺度に関する結果と人間関係希求型質問に関する結果が食い違っているように見える点について検討が必要であると思われる。古市（2013）では、若者がコンサマトリー化し、世の中よりも友だちづきあいに関心があり、幸福の準拠点が友人や「地元」になっていると指摘している。その意味では、古市（2013）、阿部（2013）、原田（2014）が想定している「現代の若者」像に近い現状満足群において、開放型よりも維持型が多くなっていることは指摘どおりであるといえる。他方で、それは人間関係が濃密なものになることを意味しないと考えれば、表面的・内面的人間関係尺度に関する結果とも一致することとなる。すなわち、岡田（1999）が指摘するように、若者の友人関係が表面的で楽しさを追求する関係になってきていることが反映されているものと考えられることができるだろう。

ただし、就職に関する地元志向の結果では、有意な差は見られず、古市（2013）のコンサマトリー化に関する仮説は明確には支持されなかった。

また、主観的幸福感の比較においては、現状満足群がもっとも低くなっていた。この点は古市（2013）が提唱する「現代の若者は幸福である」という主張の根底に対し疑問をなげかける結果となった。南（2015）でも同様の分析をおこなっており、多少のちがいはあるものの現状満足群より全追求群のほうが主観的幸福感が高いことを見出している。古市（2013）、阿部（2013）、原田（2014）の考察とともに、本研究の実証的検証をふまえるならば、「現代の若者はコンサマトリー化しているのに幸せ」なのではなく、コンサマトリー化している若者たちも案外幸せで、いろいろなものを求めている若者たちがそれ以上に幸せであるということになる。現代の若者が幸せであるとしたら、それは古市（2013）、阿部（2013）、原田（2014）の指す「若者」よりも、いろいろなものを求める若者たちであり、考

察の焦点がずれているといえるだろう。

3. 今後の課題

本研究では、現代の若者の幸福を検討するに当たり、従属変数として、主観的幸福感尺度（曾我部・本村，2010）を用いた。この尺度は広く用いられているものであると思われるが、古市（2011; 2013）をはじめ、社会学の研究でしばしば指標として示されている内閣府の「国民生活に関する世論調査」で測定されているものは生活満足度である。「生活に満足している」ことをもって「幸福である」と論じているのである。しかし、「満足している」と「幸福である」ことが必ず一致するのかということに関しては疑問が残る。生活満足度は幸福のための必要条件かもしれないが、十分条件とはいえない可能性もある。また、この生活満足度は1項目のみで測られており、心理測定の見点からはとても乱暴な指標である可能性がある。この点について実証的に検証しておかないと、社会学での議論がすべて空論となってしまう可能性も考えられる。今後この点についても検討をしておく必要があるだろう。

また、本研究では大学生を対象とし、また1年生の初回授業時に調査をしているが、この時点での調査参加者が必ずしも「若者」の代表とはいえない可能性も残されている。この点も今後の検討課題であるだろう。

引用文献

- 阿部真大（2013）. 地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会— 朝日新聞出版.
- 浅野良輔・五十嵐祐・塚本早織（2014）. 日本版 HEMA 尺度の作成と検討—幸せへの動機づけとは— 心理学研究, 85, 69-79.
- 古市憲寿（2011）. 絶望の国の幸福な若者たち 講談社.
- 古市憲寿（2013）. 日本の「若者」はこれからも幸せか アステイオン, 79, 88-102.
- 原田曜平（2014）. ヤンキー経済—消費の主役・新保守層の正体— 幻冬舎.
- 平尾元彦・重松政徳（2006）. 大学生の地元志向と就職意識 大学教育, 3, 161-8.
- 豊泉周治（2010）. 若者のための社会学—希望の足場をかける 星雲社.
- 片桐新自（2009）. 不安定社会の中の若者たち 世界思想社.
- 南学（2015）. 現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討 三重大学教育学部研究紀要, 66, 171-178.
- 政木みき（2013）. 中高生が幸せな理由 NHK 放送文化研究所（編） NHK 中学生・高校生の意識調査 2012 167-191.
- 内閣府（2009）. 第8回世界青年意識調査 内閣府ホームページ <<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>>（2017年10月アクセス）
- 内閣府（2009）. 国民生活に関する世論調査 内閣府

- NHK 世論調査研究所 (2009). 「第 8 回 日本人の意識・2008」
調査 NHK 放送文化研究所ホームページ<<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/index.htm>> (2017 年 10 月アクセス)
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 齊藤茉莉絵, & 藤井恭子 (2009). 「内面的関係」と「表面的関係」の 2 側面による現代青年の友人関係の類型的特点—賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討—愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学編), 133-139.
- 曾我部佳奈・本村めぐみ (2010). 青年期における大学生の主観的幸福感—その影響要因の探索に向けて— 和歌山大学教育学部紀要: 教育科学, 60, 81-87.
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2012). 人間関係のスタイルと幸福感—つきあいの数と質からの検討— 実験社会心理学研究, 52, 63-75.